令和３年度地域福祉計画推進協議会

議事要旨

＜日　時＞令和３年１１月５日（金）　１３時３０分～１５時００分

＜場　所＞和歌山市消防庁舎３階　多目的ホール

**１　開会**

・福祉局長挨拶

　本日の協議会は、第４次和歌山市地域福祉計画策定後、進捗状況をはじめて報告する場になっている。ご承知のように地域福祉計画は、地域住民同士が思いやり、助けあい、支えあって、誰もが安心して暮らせる地域社会の実現を目指すものである。

地域福祉の推進には、地域の方々や関係機関、行政の連携が非常に大切だと考えており、今後ともご協力をよろしくお願いしたい。

・出席委員の紹介及び挨拶

和歌山市身体障害者連盟会長　畠中常男氏

和歌山市民生委員・児童委員協議会会長　市川博康氏

和歌山市障害児者父母の会会長　岩橋秀樹氏

和歌山大学経済学部教授　金川めぐみ氏、

和歌山市ボランティア連絡協議会会長　坂本智氏

和歌山市老人クラブ連合会会長　瀧口幹二氏

和歌山市老人福祉施設協議会会長　中谷幸子氏

公募委員　西本治雄氏

和歌山市人権委員会副会長　藤並正己氏

和歌山市社会福祉協議会副会長　宮本佳子氏

和歌山市婦人団体連絡協議会会長　宗眞紀子氏

部落解放同盟和歌山市ブロック連絡協議会芦原支部副支部長　山本昌代氏

公募委員　吉田伸一氏

・会長・副会長の選出

会長：和歌山大学経済学部教授　金川めぐみ氏

副会長：和歌山市障害児者父母の会会長　岩橋秀樹氏

・会長（議長）挨拶

地域福祉計画も第４次に入り、国の動向として、我が事・丸ごと、地域共生社会、そして今年度からは、重層的支援体制のことが言われている。災害等の関係もあり、まさに今、地域福祉の力が試されようとしている。そのなかで、どのような形で地域福祉をしっかり発展させていくことができるのか、この第４次計画の進捗状況をご確認いただいて、様々な角度からご意見の方をいただければと思う。何卒よろしくお願いしたい。

**２　議事**

【事務局】

・次の資料について事務局から説明

**計画策定後の経過および実施プランについて【資料１～４】**

【議長】

事務局から説明があった事項について、各委員で意見、質問等があれば挙手してほしい。

まず、私から言わせていただくと、資料３、地域福祉計画の指標について、それぞれのアクションプログラムごとに指標が対応しているが、ここから和歌山市の状況で見えてくるのは、災害対応、先日の断水の給水支援等を要援護者の名簿を使って支援したというような形で、かなり災害の備えであるとか、それに対する準備体制というところでは市民の意識が上がっているというのが、この指標の二つ目でわかる。けれど、アクション３の部分、プログラムＥ・Ｆに特に関わるところで、やはり参加に満足している市民の割合が若干下がってきている。それから、地域住民の助け合い活動に満足している市民の割合が、平成２８年に比べて半分近くに下がっているというような現状がある。けれども、住みよいまちだという風に感じている最後の指標は上がっている。

そうすると、この数値で何が言えるのか、もちろん総合的な要因を勘案しながら考えていく必要はあるが、市民は、自分たちで活動して、助け合いを作っていって、良いまちになるような方向性に行っているのかというと、この活動の指標から見るに、逆の方向にいっているような形になっていると思う。

むしろ、行政が出てきてしまうことによって、「じゃあ私たちやらなくてもいいんだ」みたいな話になってしまったり、逆に市民の方が一生懸命やっているので、それに任せるような形を行政がとってしまうのも良くない。そのあたりのバランスを考えつつ、特にやはりプログラムＥとＦ、担い手の部分になるが、和歌山市には多様な担い手の方がいると思うので、その方たちが積極的に他の方も巻き込みながら活動ができているのか、ないしはそれを養成する体制、それもその養成のあり方が各課バラバラでやっているのではなく、各課が連携をしながら担い手づくりの体制が階層的にちゃんと地域福祉を進めるにあたってできているかどうかっていうのは、プログラムの状況からは少し見えづらい。各課では担い手養成しておられるが、それがどういう関係性があってどういう階層で立つのかということがあまりはっきりしない。そのあたりはぜひ今後も考慮をしていただきたいと感じている。

【委員】

今、会長が言われたことで、指標の数の上限というか、満足しているのが80％超で高いと思う割には一桁のものがあるというのが、去年のコロナ禍でなかなか動くことができなかったのが理由なのか、この指標の差が激しいところをどう総括するのかが、この資料からはなかなか読み取りにくい。指標の中のバランスの悪さというか、良いまちだと80％超の市民が感じているのに、できていないところも多いというのは正直なところどう捉えるべきかわからないところ。

【高齢者・地域福祉課長】

委員のご指摘のとおり、地域福祉計画の指標の中で、特にプログラムＥ・Ｆのところが数値が低い。ここ数年の動きを見ても低調であることは我々も認識をしている。その上で和歌山市を住みよいまちということで84％という高い数値となっているが、この数値は毎年ずっと高く、それは和歌山市の良い自然環境等が考慮に含まれたり等で高くなっていると思われる。

その上でこのプログラムＥ・Ｆの協働事業の担い手の養成、担い手や活動を支える体制の充実の数値が低くなっていることについて、各地域やＮＰＯ、ボランティア等の活動自体は非常に活発だが、それを包括的に一つにまとめていく、横串を刺していって、総合的に課題が見え出して解決していく、そういうところが行政として少し脆い可能性がある。そういう点で市民に対してアピールが足らずに、数値が低い状況になっていると考えている。

【議長】

今の話にあった横串を刺していくというのはとても大事で、重層的な支援体制をつくるというのは、縦割りではできなくて、横でどう連携するのかが大事になる。担い手の養成の面でそのあたりをぜひ意識していただきたい。どういうふうにしたら進められるかということでご考慮いただけたらと思う。

【委員】

災害時の件で、自助、共助、公助と言われているが、私的に共助がとても大事かと思う。お互いに自治会組織の中で、隣組で、周り近所で、助け合っていくということがとても大事。その組織づくりが、和歌山市はとても貧弱のように感じる。

この間の断水の件についても、市の職員が回っていくのも大事だが、各自治会があるんだから、地域の生活困窮者、障害のある方、高齢の方、ひとり親家庭のところ、この辺については、自治会の会長が一番よくわかっているはず。市でいちいち名簿を見ながら訪問するということも大事だと思うが、それを自治会を通してするとか、そういうのがあまり見えてこない。それから各地域の福祉関係の組織に対する行政の支援が全く見えてこない。高齢者たちの活動の場にしても、公民館での活動とかがわずかにあるが、地域の高齢者が集まって何かイベントをするとかもない。だから市が自治会を通して、なら自治会はこんなふうに組織して、ってそれが大事じゃないかと思う。

それから学校教育について、地域の先人たちを招いて小学校で地域との触れ合いをしているということだが、コロナ禍で、私の地元では全く何もない。運動会にしても来賓はご遠慮くださいとなっている。なら学校が地域に出向いてくれるのかというと、それもない。地域福祉というものは小学校が中心っていうか、そうならざるを得ない部分もあるのではないかと私は考えている。

【委員】

私たちの地域では、去年はコロナで中止したが、毎年1年ごとに特養の施設を使って、地域の方たちの芸能の、いろいろ組合みたいなのがあって、地域の方たちが皆で発表し合う、子供たちと触れ合うっていうそういうのを自治会が始めている。最初は小学校を使っていたが、皆が高齢になってきたことで、自分たちではちょっとできないということを地域の方たちから相談があって、地域にある特養の施設とかを使うようになった。若い人たちがいないとやっぱり駄目だと思いますので、特養の若いスタッフを使って、そういうことをやるっていうのも一つだと考える。

この間の断水の時は、和歌山大学の方たちが、水を運んでくれたって言って、私の知り合いが大変喜んでいた。和歌山市内で大学も増えておりますので、そういうところの人たちとも、特に災害など、地域をつくるっていうのは和歌山大学だけではなく、薬学部であろうが何学部であろうが、災害は同じなので、そういう方たちも一緒になって、災害の勉強会に参加するっていうのも、とてもいい発想なのではないかなと思う。

【教育研究所長】

先ほど、学校に地域の先達の方をお呼びして、子供たちの学習活動を一緒にやっていただくという取り組みについて、令和２年度はコロナの影響で実質的には９月以降の活動となった。また、本事業の活動主体である地域先達の方の多くがご高齢であるということ、それから感染拡大防止の観点から予定していた内容を1年通して十分に実施できなかった学校もあった。

その中でも、学校長の判断になるが、感染症対策を講じながら取り組んだ学校もあった。活動内容としては放課後の学習支援であったりとか、クラブ活動の支援であったりとか、図書室や花壇等の環境整備、本の読み聞かせ、昔遊び、戦争体験のお話、地域伝統行事の指導などを行った。

【議長】

教育研究所さんの取組は、大変すばらしいし、しっかりやっていただいていると思う。でも少し委員さんが言われていたことと違ってきていて、市がとか、学校サイドから地域の方に依頼をしてやってもらうのだと、個々の人の点だけの繋がりになってしまって地域の広がりを呼ばない。行政が子供たちのためを思ってやってしまえばしまうほど、お仕着せになるというのが現状かと思う。よくやっていただいてるのにこういう言い方は非常に申し訳ないが。

私が別の自治体で経験した話で介護保険の協議体の話が出た。資料４の９ページの協議体や生活支援コーディネーターのところ。ある自治体のある圏域の協議体では、皆さんが地域で話し合って、やはり子供が宝だという話になった。そうしたときにどうしようかって言ったら、まさにその昔遊びであるとか、昔こんな農機具を使ってたというのを皆で話に行こうという話で盛り上がって協議体になった。

それはやはり地域の下からの盛り上げであって、この小学校の子供たちが大事だから、こんなことをやってあげたいって地域の方が話し合って、それで課題発見をして、一緒に、学校まで行ってやる、みたいな相互作用で、その間の学校の連携も、ずっと学校と協議体のリーダーが交渉してやっている。そういったところの部分のあり方、横に広がるような連携のあり方が、多分委員さんが言われているような教育と地域のコラボとか福祉のコラボなのだろうと思う。

例えば和歌山市でそういう芽吹きがあるのか。協議体はすべてそれやれとは言わないが、協議体がやっぱり親身になってその地域の独自性というものを見つめながら、相談や協議をしているのかっていうのが、実は今和歌山市の動向を見ていてすごく気になっている。１５圏域あるけれども社協の地区は４２地区となっている。そことの関係性がどうなっているのかも含めて協議体の進捗状況を伺いたい。

【地域包括支援課長】

第２層協議体が１５か所あるが、令和２年度は、なかなかその集まること自体が難しいということで、協議体の開催数も少なかった。令和３年度、これは砂山地区だが、協議体の中で「砂山みんなでやろう会」が起ち上げられて、地域交流のスタンプカードを作成して、地域でラジオ体操などの参加者にスタンプを押して、地域共通券を発行して、地域の商店で利用できるような取組をみんなで話し合って、実現されているということがある。

もう一つ、四箇郷地区で、令和元年１１月に、ちょっとした困りごとを地域で解決できないかっていうのを検討して、1日限りの生活支援隊というのを実施した。令和２年度はコロナ禍で第２弾は実現できなかったが、その住民主体で運営していただく形の生活支援隊を年明けぐらいに実施しようかということで、準備を進めていると聞いている。

どうしても令和２年度は活動自粛で活発なものができなかったが、コロナになる以前からやっているサロンや花づくりの活動は地道に続いている。

【議長】

そういった好事例、地域の課題をちゃんと発見をして活動につなげている事例を、ぜひその他の協議体にも知らせていただきたい。

【地域包括支援課長】

好事例については、その活動をしている協議体に、他の圏域のコーディネーターも一緒に入って運営の状況等を見てもらう等、活動を各地域に広げられるようにしていきたい。

【委員】

資料４の３ページ、プログラムＢの方で、避難行動要支援者名簿の推進の個別避難計画について、これは国が各自治体に対して、既に作った避難行動要支援者名簿の一人一人の支援策や支援役、避難手段を決めておくという、個別計画の策定を促しているわけであるが、それに対する和歌山市の見通しと、和歌山県下の市町村の策定状況がわかれば教えていただきたい。

【高齢者・地域福祉課長】

まず、この和歌山市の避難行動要支援者登録制度というのは、高齢者や障害をお持ちの方で、災害時に自力で避難できない方の名前をあらかじめ登録し、同意をいただいた方については、各地区の支援機関の方へ名簿を提供し、各地区で共助ということで避難の支援をしていただく。そういったことに役立てていただくということで、名簿を作成している。

委員がおっしゃった個別計画というのは、その名簿に登録いただいた方、例えばＡさんを、じゃあどういうふうに避難していこうか、そういう個別の計画を立てていきましょうというのが国の方針。国は５年を目途に各市町村で計画を立てるよう言っており、和歌山市においても計画づくりに取り組んでいるという状態。

【委員】

県内の市町村の策定状況はどうなっているか。

【高齢者・地域福祉課長】

県内の市町村については把握していないので、後日資料を提示したい。

【委員】

話が戻るが、地域の担い手、そして地域の活動状況、４２地区で確かに温度差がある。この温度差をいかにして埋めていくかを地区社協も一生懸命取り組んでいる。今地区社協４２地区、ほとんどの地区の会長が、民生委員、地域の自治会、多団体と組んで、何かしなければいけないなという方向に進みつつある。先ほど、地域包括支援課から挙がった砂山、四箇郷、これは今一生懸命取り組んでくれている。

そういうなかで地域資源を引っ張り出すリーダーが絶対に地域には必要。そういう地域をいかにして作っていくか、リーダーを育てていくか、これは今後の課題であると考える。リーダーを育てるということを、とりあえずどこかで皆さんで考えていただけたら、地域がもっと良くなって、そうして福祉も良くなっていく。そしてこの福祉計画がどんどんと実のあるものになると信じたい。

【議長】

議題１については以上でよろしいか。

では、議題２その他ということで、各委員にマイクを回していくので発言をお願いしたい。

【委員】

先程から「触れ合い」という言葉を聞くが、ここ２年程はコロナで実際は触れ合えていない。例えば身体障害者その他の障害者が拠点にしている和歌山市のふれ愛センターも、あまり触れ合えない状態で、去年からほとんど行事はできていない。非常事態宣言が解除されて緩和してもやっぱりまた再発するんじゃないか、第6波が来るんじゃないかっていうふうな話ばかりで非常に危惧している。

最近非常にありがたいなと思ったのは、先程の公助、共助の話で、今回の水管橋の崩落による断水に際して、自衛隊の人、和歌山大学の人、そういった方々が、支援者の自宅に重たい水を運んで来てくれた、大変ありがたかったという話を多数聞いている。これをぜひご報告しておきたいと思った。

【委員】

水管橋の崩落等いろいろあったが、私の地区の近くで大雨のときに山崩れが発生しまして、人的な被害はなかったが、市の担当者であるとか、消防の方、団地の自治会の方、自治会の会長さんが一生懸命、避難指示が出る部分で、１軒１軒家を訪問して避難するようにと、そういう行動をされていた。自分は民生委員としても行って、その地区の担当民生委員も来て、そこで共同して１軒１軒、避難するよう言って回った。単独でするとどうしても手の届かないところ、見落としているところが出てくると思うので共同して事に当たるっていうのが大事だと思う。

【委員】

この前からの水管橋の件に関しては、本当に地域の皆さんに助けていただいた。力強い地域っていうのは必要だと思うが、このコロナの関係で、もう約２年、地域の会議がほとんどできていない。今後コロナが明けて、さあ活動しようかっていう時に、果たしてみんな出て来れるのかなと、このまま地域がつぶれてしまうんじゃないかなっていう危機感を抱いている。

先ほど意見があったように、若い担い手の人をどんどんこれからも作っていかなければいけない。コロナで中に入ってしまった皆さんをどうにかして出して、地域の活性化というのは会うところから始まるので、それをどうしたらいいかっていうのを、行政の皆さんと一緒になってやっていきたいと思う。

【委員】

先日の水道の件で、私自身断水地区に住んでいるが、当事者として本当に水がいつ止まっていつ出るかということも、あまり具体的な連絡がなかったように思う。これは今度災害があったときのためにすごく勉強になると思った。　私自身ももっと積極的にアクションしないと、今回はただ受けとめるだけで終わったので、勉強になったと思う。

【委員】

こういった会議の場に出てくるような方はいろいろ交流もしていると思うが、どこも私は行きたくない、もう人付き合いするのが嫌だっていう人が結構いる。そんな人がこの間の断水といったトラブルに遭遇したら、助けてもらえない事態が発生するかもしれない。そういう人をいかに助けるかというのも、これからの課題かと思う。

もうひとつ、老人活動について、介護認定を受けたら施設なり世話をしてもらえるような場でいろいろ活動ができたが、認定を受けられなかったらそういうところに行けず家にじっと居ないと仕方ない、というようなことをよく言われる。そういう声があることをこの場を借りて言わせていただきたい。

【委員】

介護の認定の話は、行政も大変な財政のなか厳しくやっていかなくてはならないということもあるので難しいと思うが、そういうデイサービスであれば自費でも参加することが可能かと思う。

４２地区の社協の話を聞けたのはすごく良かった。そういうのを聞けば、うちの近くの社協はどうなのかなとか、アプローチしてみようかなとかそういう気持ちにもなる。先ほど言われたように、ある程度地域を競争させるというのは大切なことだと思う。

【委員】

先ほど高齢者の交流が希薄になっているという話があったが、読売新聞に面白い記事があった。コロナ禍、高齢男性ほど孤立していると。どういうことかというと、新型コロナウイルスの感染拡大の影響で、人との繋がりが失われる社会的孤立に陥った人の割合は、男性で高齢であるほど大きかった。その理由としては、高齢者の方が社会的孤立に陥る人が多かったのは、若い人に比べて、ＳＮＳやインターネットを利用する人が少ないことが背景にあると思われる。また、高齢ほど新型コロナの重症化のリスクが大きいと言われ、そのメッセージも高齢者の外出控えを促進した。その結果、ずっと家の中にいて、誰とも繋がらない状態になってしまったことがデータからわかったと締めくくられているが、高齢者問題に一石を投じた記事で、興味深いと思った。

【委員】

皆さんの活動を拝聴して素晴らしいと思った。コロナ禍で大変な時期のなか、規制緩和はあるけれども感染対策はそのままでということなら、新しい形で活動をしていく工夫をしていかないといけないと思う。また先ほど皆さんの意見を聞いて、地域の住民の結束ってすごく大事だなと感じた。皆さんご存知のとおり南海トラフの大地震とか、そうした災害が起こった時にやはり孤立しないように、そうした対策にも生かされていけばいいと思う。

【委員】

こういう地域福祉というのを本当に地域の中で充実させていこうというのは、地域の中から動いていくということも大事だと思うが、それができる地域はもう活動がスムーズに運営されていると思う。ただそれができていないところはかなりあるように思う。そうしたところは、私はやはり小学校が中心にならざるを得ないなと思う。小学校が地域に働きかけをする。そのことで地域共同体をつくっていく。そしたら、何年か経てば学校から手が離れていくだろう。その辺を組織として、自治会組織と福祉組織、これを両輪でやっていくべきなのではないかと思う。それにはやはり行政の援助、支援、指導があって初めてできることも多い。その辺りを和歌山市にお願いできればと思う。

【委員】

その地区その地区に応じた活動を、これから４２地区を筆頭に、福祉活動をやっていきたい。水管橋をはじめ、水が止まっただけでこんなに困った、これが大きな災害になったらどうなるのか、そういうのが分かったひとつの出来事だったので、地域を、またしっかりと自分自身、見つめ直して頑張っていきたいと思う。皆さんのご協力をお願いしたい。

【委員】

私も北部に住んでいるので、この間の断水は大変びっくりした。地域と言う前に、隣近所の皆さんにどれだけ助けられたか、お互いに助け合うことができたか。　共助という言葉で言えばいいのか、市が県がと言ってる場合じゃなくて助け合わないといけない。あのときは本当にそう思った。

私達の地域は、わりに各種団体の繋がりがあって、先日学校から消防団のことを勉強していると相談があって、婦人防火の会長が学校にお話しに行くことになった。地域の婦人防火のかたから話を聞くことで子供たちがどう考えるか。防火給水の時も思ったが、子供たちがボランティアのジャンパーを着た方が働いている様子を目の当たりにしてどう感じたか、きっと勉強になったと思う。こんなふうに機会を積み重ねて、担い手を育てていかないといけないと感じた。

【委員】

支援者リストの件で、国では５年目安で計画を策定する話をされていたが、私の知っている市町村では、人口が全然違うからもあるが、今２巡目している。数年前にしていたところが、今だったら状態が違うかもわからないということで２巡目をしている。そこはそれだけしているじゃないか、っていうことを言っても仕方がないところもあると思うが、もう何年か経っているのものは古いと思って動いている自治体もある中で、和歌山市というこの人口の多いところがどういうふうにしていけばいいのか、どういうふうにすればスムーズに計画できるのかっていうのを、市だけではなくて、自分たちが協力できるところがどうなのかっていうことを考えながらしないと、災害が起こって皆でしていくっていうのはとても無理ではないかと思った。

【議長】

ありがとうございます。

本当に皆さんにマイクをお回ししてよかった。本当に皆さんのご発言ひとつひとつが地域福祉の重要な要素を形作る内容であると思うので、ぜひ今後とも施策の形成に、こういった発言を役立てていただければと思う。

**３　閉会**